



うつせみのあなたに  
短文集 その1

星野廉





# 目次

|                                     |    |
|-------------------------------------|----|
| ひらがなで入っている言葉<br>* . . . . .         | 3  |
| ここはどこ？<br>* . . . . .               | 7  |
| 文章は字面が命<br>* . . . . .              | 13 |
| 昼の思考、夜の思考<br>* . . . . .            | 17 |
| 文字に睨まれる<br>* . . . . .              | 21 |
| 自分の気配、気配としての自分<br>* . . . . .       | 27 |
| 夜に洗濯をする<br>* . . . . .              | 33 |
| 存在と無が、存在と存在に見えるという話<br>* . . . . .  | 39 |
| 音と声があるだけ、音と声の流れがあるだけ<br>* . . . . . | 45 |
| ごみは名詞に似ている<br>* . . . . .           | 51 |
| 短いの反対は長いではないという話<br>* . . . . .     | 55 |
| 正々堂々と出あってしまえばいいのです<br>* . . . . .   | 61 |
| 同床異夢、異床同夢                           |    |

|                                |     |
|--------------------------------|-----|
| * .....                        | 65  |
| あーむ。                           |     |
| * .....                        | 71  |
| 「あなた」は、短すぎない、長すぎない、重すぎない、軽すぎない |     |
| * .....                        | 77  |
| 出たものは「静止」してはいないという話            |     |
| * .....                        | 83  |
| ぎらい                            |     |
| * .....                        | 89  |
| 夢にうつるまでのあいだ                    |     |
| * .....                        | 95  |
| 人面〇〇                           |     |
| * .....                        | 101 |
| 人に動物を感じる時                      |     |
| * .....                        | 107 |

ひらがなで入っている言葉



＊

幼いころに聞き覚えた歌が、何かの拍子に口をついて出てくることがあります。最初は漏れるように出てきます。ぼつとか、ぼとと。それから、あれよあれよと、つぎつぎに出てくるのです。感じとしては、意味のない音として出てきます。

ひらがなばかりで出てくるといえば、お分かりいただけるでしょうか。ひらがなです。カタカナではありません。角張ってなく、まるくやわらかい音なのですが、こういうのは、日本語を母語としている人にしか、分かってもらえない感覚かもしれません。

何と言ったらいいのか、音の色と文字の形が通底している感じです。それとも、音の形と文字の色の通底かな？

幼い子どもにとって、歌詞の意味の大半は分からないだろうし、べつに分かろうともしていない。ただ音として覚えていくのです。

まさに「ひらがな」で頭に——おそらく身体にも——入っているようなものです。つまり、音だけ。ひらがなで歌っているようなものです。本当は、たぶんそのひらがなという文字さえない。音だけ。なにしろ、聴いて覚えたのですし、譜面や歌詞カードを見ながら覚えたわけではありません。

音だけで覚えている言葉がある。音だけ。音だけの言葉。文字のない音。

もともと言葉は無文字だったはずですね。個人としての人にとっても、種としてのヒトにとっても、初めはそうであったはずです。

文字は後付け。初めに言葉があった。初めに声があった。というよりも、たぶん音があった。

もし、初めに文字があったとしたら。

\*

もし、初めに文字があったとしたら、それは文字というよりも、印であったり、(比喻としての) 顔であったりしたのではないのでしょうか。

いま話している「文字」とは、ヒトが文字をつくる前の「文字」です。ヒトはその「文字」を真似て自分たちの文字をつくったのかもしれませんが。ややこしい話をして、ごめんなさい。このまま空想を続けさせてください。

その「文字」は、雲の模様や山の形や水の流れや草の姿や木の影に見える印であり顔です。その印と顔はおそらくヒトにしか見えない。他の生き物たちには見えないのです。

そうだとしたら、ヒトは孤独な生き物なのかもしれません。意外と何かを忘れたか失った生き物なのかもしれません。でも、だからこそ、ヒトなのかもしれません。



ここはどこ？



＊

ここはどこなのだろうとよく考えます。自分は誰なのかとか、自分とは何なのかという気持ちとは違います。自分という存在を保留あるいは度外視したうえで、ここはどこなのかと考えるのです。

施設や病院に収容された人が一番よく口にするのは、「私は誰？」ではなく、「ここはどこ？」と「(あなたは)どなた？」だと言われます。「自分は何ぞや？」という問いはよほど心に余裕がないと頭に浮かばないのではないか。だいいち、そんなことを考えるのにはパワーが要るだろうと想像しています。

施設で面会した母が口にした「ここ、どこなの？」が忘れられません。似た状況に置かれれば、私もそう言うはずです。「ここはどこ？」という問いに、捨ておかれた人間のよるべなさや切羽詰まった人間の叫びを感じます。

人にとって根源的な疑問ではないかと言いたいくらいです。人は生まれて「ここはどこ？」とおぼろげながら感じ、「ここはどこなのだろう？」とときおり考えながら生き、「ここはどこ？」とおぼろに思いながら亡くなる、という気がします。

＊

いまこうして文章を書いている場所は自宅の居間なのですが、ここはどこなのでしょう。頭では分かっている気がするものの、よく考えると不明になります。PCに向かって文章を入力している時には、いったいどこにいるのでしょうか。

サイトにログインしてキーボードを叩いて画面に直接記事を書いている最中には、ネット空間にいるのかもしれませんが。では、大学ノートにペンを走らせ文字をつづっているさいには、どこにいるでしょう。

文章を書いているさなかの自分の居場所は不明です。行方不明なのですが、それを意識すると、とたんに文字が書けなくなります。逃げていくのです。

だから、居場所など考えないようにして、言葉を書くためには心を「どこか」にあずけます。その「どこか」は「かなた」ではないかと思うことがあります。「ここ」でないことは確かです。

＊

小説を読みながら、あれこれ情景を思い描いているあなたは、どこにいらっしゃるのでしょうか？  
映画に見入っているあなた、音楽を聞いているあなた、トイレでぼーっとしているあなた、そして、この記事を読んでいるあなたはどこにいらっしゃるのでしょうか？

病院の待合室なんかでスマホでゲームをしている人を見ると、あの人はどこにいらっしゃるのかと考えこんでしまいます。あと車や電車で移動している人も——自分を含めてですが——どこにいらっしゃるのか分かりません。

どうやら意識について考えているようですね。身体と意識を分けて考えているということでしょうか。意識と体はつながっているはずなのに、それぞれが別のものだと、意識しているらしいのです。

たぶん意識しているのは「意識」でしょう。身体が恋しいのかもしれませんが。きっと離れられないのです。別のものだと意識すること自体が一体感をいただいている証拠です。

＊

夜に寝入る時の感覚が好きです。意識だけになってずっと夢うつつの境地に入っていくとき、このうえない安らぎを覚えます。寝際には論理的な思考が希薄になりますが、道理や筋道にかなった思考ではすくい取れない物や事と触れ合う時空の中にいる気がします。

お酒や薬物の助けを借りなくても誰もが毎晩経験するであろう、そうした「夜の思い」を大切にしたい。ぼーっとしている時だからと言って、ないがらしろにしたいくはない。

むしろ「夜の思い」について積極的に考えてみたい。言葉にできこない物や事や思いに、あえて言葉を与えてみたい。日の短くなった十二月の午後のいま、そんな気持ちでいます。

外は雨です。



文章は字面が命





＊

本は見るもの、眺めるもの。そう、ながめるのです。読むのは一度くらいでいいです。どうせ、どんなに努力しても完璧には読めないのですから、一度だけ読んで、あとはながめるのがいちばんです。

春は曙。本は字面。人形は顔が命。おやじはずらが命。本だって顔がいちばんです。一度読んだ本をながめるんです。もちろん、本は開くんですよ。たしかに、表紙や裏表紙や背表紙もながめ甲斐がありますけど。

ああ、あそこにはああ書いてあったなあ。こんなこと書いてあったっけ。はいはい、そうでした。え、何ですか、これ。ひとり言をつぶやきながら、ながめるのです。

私は飲めませんが、お酒の好きな人は一杯やりながら本を開いてながめるなんて最高じゃないですか。至福の時ってやつです。お酒はほどほどにしてくださいね。何でもやりすぎは毒ですから。

＊

読むというのはかなり不自然な行為ではないでしょうか。なんでこんなことしてるの？ 何が面白いの？ ほかにやりたいことがいっぱいあるから、早く済ましましょ。というふう気持ちになるのは当然でしょう。

もちろん例外もあります。ずっと本を読んでいられたらとか、このまま読みつづけて、逝っちゃってもいいという場合がありますね。わかります、その気持ち。死ぬほどわかります。でも、いまはそんなパワーはありません。

本を読んでいるあいだは、心と魂がどこかへ行っちゃいます。「ここはどこ？」状態。じつに気持ちがいい。

これにはまると、もう大変。仕事や子育てや夫婦関係や人間関係まで放りだして、書に淫してしまうのです。そういう例をたくさん見てきました。あなたもインシテミル？

\*

文章は字面が命という話でしたね。文字にも文章にも本にも顔があると思うんですよ。

本をめくってページをながめていると、画数の多い漢字が際立って黒々とした字面もあれば、背後の紙が透けて見えるすかすかした面もあるし、ひらがなが多めで蠟引きの紙の趣を感じさせる頁もあります。意味不明なことを書いて、ごめんなさい。

どれとして同じ顔はありません。文字や文章や頁の顔を見るためには、読んじゃいけません。ぼーとながめるのです。眼鏡をしている人は外すといいかもしれません。文字が文字でなくなってくる瞬間が訪れれば、しめたものです。

\*

ゲシュタルト崩壊なんて無粋な言葉が頭に浮かんでも、忘れましょう。観念的な言葉は、あなたのまわりにある、生きているリアルな細部との出会いをぶち壊します。さあ、幸せになりましょう。難しい言葉があれば、ながめるのです。

ゲシュタルト崩壊、承認欲求、存在と無、仏蘭西現代思想、独逸観念論、難解、晦渋、憂鬱、魑魅魍魎、春は曙。

顔が見えましたか？ 顔に出会えましたか？ 読んじゃいけませんよ。考えるんじゃないですよ。ながめるのです。力を抜いて。ぼーっとしてきましたか？ そうです、その調子です。

昼の思考、夜の思考



＊

ここはどこなのでしょう。

考えれば考えるほど不明になります。PCの前にいる、家の居間にいる、住所を番地まで付けて口にしてみる、地図で見当をつけてみる。いまは、住所をグーグルで検索するとストリートビューでこの家の様子が映像として出てきます。

ストリートビューは面白いですが、考えようによっては怖いですね。いろいろな意味で恐ろしくなります。画像を操作していると、写真が地図になったり、その縮尺を自由に変えたり、さらに拡大すると上空から見た写真になります。

世界地図や衛星写真や地球儀で、ここは、このあたりかなとポールペンの先でこつこつと突いてみる。ここは日本国にある〇県〇市〇町〇番地。ここは地球。ここは太陽系。ここは銀河。ここは宇宙。

〇県、日本国、地球、太陽系、銀河、宇宙——広くて大きな「そういうもの」は、言葉でしか知らない「何か」であるはずなのに、その存在が事実だと言われている。その「何か」をどんどん「広く」「大きく」していくと、それにつれて抽象度が高くなる気がします。

広く大きくなるほど、体感では容易に確認できないものになり、どんどん遠ざかっていくのです。

＊

恥ずかしい話なのですが、いまだに天動説を信じています。

子どもの頃には太陽や月や星が動いていると信じて疑いませんでした。まして地球が丸いなんて思いも考えもしませんでした。

いまはどうかといえば、揺れています。その時の気分で地動説と天動説のあいだを行ったり来たりしているのです。地球が丸くて太陽の周りをまわっているという話は学校で習って知っていますが、どうしても地動説が体感できません。そんなわけで、二つの説のあいだでいまも揺れています。

そもそも「太陽」はぴんときません。お日さまです。「地球」は地が丸いという意味ですけど、これもしっくりしません。せいぜい地面ですが、これだと平べったい感じがしませんか。

お日さまが、東から上り、西に沈む。夜のうちに、地面の反対側をまわるような形で、地球の周りをまわっている。そう感じられます。これが体感というものなのでしょう。

いや、本当は地球のほうが太陽の周りをまわっているのだ。そう学校で習ったのだから、そうなのだ。うんうん。これが昼の思考です。恥とか外聞とか世間体に縛られているのが、昼間の自分です。

夜になると、まして夜中に目が覚めたときには、恥も外聞も世間体も気にしない境地にいるので、堂々と天動説を信奉しています。これが夜の思考です。

人は子ども時代に天動説を信奉し、やがて地動説に改宗するが、その後も密かに天動説の信者でありつづけるとも言えそうです。

さらに言うと、人は夜には子どもになります。夜は体感が人を支配するからでしょう。退行ですか？ そうかもしれません。いや、そうにちがいません。寝るにはまだ早そうです。

文字に睨まれる





＊

漢字が苦手です。小学生のころ、漢字の読み書きを覚えるのに苦労しました。いちばん嫌だったのが筆順というやつです。あれを押しつけられるのが、嫌で嫌でなりませんでした。トラウマになっているのではないかと思うくらいです。

漢字って厳めしくないですか？ ほら「厳」って、いかめしいじゃないですか。睨まれている気がしてなりません。凄まじい気がしてなりません。厳格の厳ですもの。威厳の厳ですもの。戒厳令の厳ですもの。恐ろしいったらありゃしない。

いかめしいし、おごそかだし、きびしさもある。GON、GENという遙か遠くから海を越えてやって来た、異物の持てる力と圧を分散する。厳めしい、厳か、厳しい、と和語を当て、和語と組みあわせて軟化する。

「厳」を「いか」ってひらがなで書くと真が抜けて愛嬌があります（異化も感じます）。こう感じるのは、たぶん昔々に中国から来たいかめしい文字を飼いならしているのしょう。手なずけたんでしょうね。

大したものです。厳めしさを飼いならし手なずけるなんて、す、すごすぎです。

＊

とつぜんですが、本来なら、人は本なんて読みたくないのです。

よく考えてください。話すものである言葉を、わざわざ文字にして、それを見るのではなく、読むのですよ（じっさいには「見る」ことは至難の業であり、しかもまともには読んでいません）。それを理解したなんて言っているのですよ。かなり不自然で、妙ちくりんなことを、人は発明して毎日やっているのです。

よろしいでしょうか。文字はあくまでも後付けなのです。無文字社会もあったといえます。人類にとって、無文字でいくという選択肢もあったはずですが。文字社会でいく必然などないという意味です。

それがいつかどこかでズレてしまったのです。言語の獲得（もともとの無文字の話です、文字抜きの話）と同じくらいの生物学的逸脱かもしれません。

あえて書かない、読まないという選択もあったはずなのです。ホモ・サピエンスには。しゃべるだけという選択肢があったはず。

＊

漢字には文章でしか出会えません。漢字から、こしらえたい、ひらがなやカタカナもそうです。数字もそうですね。数という概念とは違いますよ。ここでは、そういう難しい話をしているのではないのです。

目に見えて、ペンでなぞって書ける具体的な物について話しています。文字は物でもあるのです。抽象と具象のあいだを行き来している生き物と言えるかもしれません。

どんな文字もいとおいしいです。どんな言葉もいとおいしいです。分け隔てはしたくありません。

「天は word/language の上に word/language を造らず、word/language の下に word/language を造らず。」

いとおいしいを愛おいしいと書くと、愛という漢字があらわれてきて、ほっとします。愛は好きな漢字です。いい感字でいい感じなのです。みなさんにも、お好きな漢字があるのではないのでしょうか？

あと、山、川、草、木、森、なんて好きです。景色や姿が浮かんできませんか？ 漢字の力ですね。ひらがなやカタカナにはない魅力です。漢字の、もよう性、かたち性、かお性はすごいです。凄すぎます。

身が引き締まって厳肅な気持ちになりました。あら、また睨まれた。



自分の気配、気配としての自分



＊

人が自分を直接見たことがないというのは当たり前でありながら、ふつうは考えないことだと思われます。でも、こういうことが気になる人がいます。ひとりだけですが、私も知っています。私にとってきわめて近い人です。でも、見たことはありません。会っているような気はします。

＊

私にはお化粧をする習慣がありません。だから自分の顔や姿を鏡に映して、その鏡を覗きこむことはほとんどありません。朝、洗面所で顔を洗ったついでとか、シェーバーでひげをそったあとに確認のためにちょっと見るくらいです。

毎日、それも日に何度か、そこそこの時間を鏡の前で費やす人は大変だろうと想像します。お化粧なんて面倒ではないかと要らぬ心配をしてしまいます。お金もかかるにちがいません。もちろん、お化粧が楽しいという方もいるはずですが、お化粧という行為に何らかの価値を見出している人もいるでしょう。

＊

私の場合には、鏡を前にすると、つまり自分の顔や姿を見ると、自分が見えなくなります。自分であるはずの像は目に入っているのですが、見れば見るほどそれが何なのか分からなくなるのです。

自分だとは頭で分かっています。その姿と形は見えていますが、見留められないのです。認められないのではなく、見留められないです。目に留まっていない感じなのです。ですから、鏡を前にしたまま目をつむると、目をつむる直前に見えていたはずの顔が像として残っていない、つまり残像がないのです。

特に顔なのです。着ている服とかは思い出そうとすれば何とか思い出せますが、顔を思い浮かべることができません。念のために言いますが、いま話しているのは、鏡を前にしたまま目をつむる直前の自分の顔のことです。髪型や耳も思い出せません。首も自信がありません。

\*

必死になって自分、つまりさっき見たばかりの自分の顔を思い出そうとしているのですが、なかなか浮かばないうちに、かつて写真で見た自分の顔が浮かんできます。写真の像が優勢になってくるともう駄目です。そちらに意識が行くのか、写真の像ばかりが、頭か臉の裏か知りませんが、そこに浮かんでくるのです。

その写真というのは、証明書に貼るために撮ったものです。数年ごとに取り替えなければならぬ写真があって、数か月前に見た「最新の」私を撮った写真が頭に浮かびます。私の写真というと、それくらいしかないのです。

\*

鏡は自分の姿を見るためにあるとされていますが、鏡に映っているのは自分なのでしょう。鏡に映っているのは姿や形というよりも時間だという気がします。正確に言えば、時間ではなく、「ずれ」なのです。抽象である時間を人は「見る」ことができず、「前」と「今」との「ずれ」として感知するしかない気がします。

この「ずれ」こそが私にとって具体的な自分の像なのかもしれません。残念ながら、「それ」は見えませんが、「それ」の気配を感じることはできます。その「気配」に親しみを覚えます。愛おしくてたまらないくらいです。「自分」とは「気配」なのかもしれません。

\*

人が自分を直接見たことがないというのは当たり前でありながら、ふつうは考えないことだと思われれます。でも、こういうことが気になる人がいます。ひとりだけですが、私も知っています。私にとってきわめて近い人です。でも、見たことはありません。会っているような気はします。



見ているという気配、そして見られているという気配、これが自分なのかもしれません。



夜に洗濯をする



＊

人は夜になると洗濯をします。洗濯機を回すのではなく、自分の手でごしごし洗うのです。何を洗うのかというと、心、意識、魂、記憶です。魂の洗濯、意識の洗濯なんて何だか難しく聞こえますが、誰でもやっていることなのです。

で、何を洗うのかというと、汚れではありません。断じて汚れではないのです。洗うのは染み、正確にいうと、たぶん模様です。

染みとか模様は何かに見えますね。染みそのものとか模様それ自体ではなく、染みや模様に何かが見えるという意味です。

顔に表情を見るのとも似ています。ほら、表情って顔に浮かんだ模様みたいじゃありませんか。

その何かに似た染みというか模様というか表情みたいなものを、人は夜になるとごしごし洗うのです。

＊

命の洗濯という言い方があります。日常のしがらみから逃れてのんびりすることですが、命をごしごし洗うなんて、いいたとえだと思います。夜になると、あちこちにいる各人がいっせいに命を洗うなんて絵になりませんか。

ただ、私がいまお話ししているのは、それとはちょっと違います。

夜の洗濯で私の頭に浮かぶのは、マネーロンダリングです。漠然としか知らない言葉なので意味を調べてみると、「お金を洗ってその出所を消す」という、比喩なの現実なのか分からない説明が書いてありました。

これだと思いました。人は夜になると「昼間の記憶を洗ってその出所を消す」のです。

＊

人は眠っているあいだに夢を見て、その夢の中で昼間に起きたことの整理をしている  
というか、記憶のおさらいをしている。きょうはあんなことがあったなあ、こんなこと  
もあったなあ、と。

そのうちに、あれはめちゃくちゃ怖かったなあ、あの時には恐ろしくておしっこを漏  
らしそうになった、と恐怖の記憶も出てくる。

ここなんです。恐怖をおさらいし整理することで、じつはごしごし洗濯をしているの  
です。振りかえることで恐怖を飼い慣らすといえ、お分かりいただけるでしょうか。

記憶にまとりついた意味づけを放棄するとか、あったことを虚構化する、つまり距  
離を設けることでベールに包んだり、場合によっては改変したり、さらにはなかったこ  
とにして、すっとぼけるとか、しれっとやりすごすわけです。

＊

でも、記憶の痕跡は消せません。何かの形で残っています。いったんついた染みは消  
せないということですね。

いずれにせよ、こういうのは洗濯であり、一種のマネーロンダリングだという気がし  
ます。

出所を消してきれいに見せる。要するに誤魔化しているんです。なぜって、めちゃく  
ちゃ怖いから。さもないと、人間なんてしんどくてやってられません。

そんなわけですから、大丈夫です。何がって、夜の洗濯ですよ。今夜もよい夢を。







存在と無が、存在と存在に見えるという話



＊

小話ですので、気楽に読んでください。

＊

サルトルの『存在と無』の英訳を初めて見た時には拍子抜けしました。そのタイトルにです。Being and Nothingness なのです。東京、神田古本屋街にある洋書専門店で見つけて、啞然、そして呆然となりました。

Being and Nothingness ですよ。か、軽すぎです。

サルトルさまの『存在と無』さまに、そんな日本の中学生でも知っているような単語のタイトルを当てるとは何事だ。そうは思いませんでしたが、あまりにも意外で、その本をこどもりとした店の床に落としそうになったのを覚えています。

＊

日：『存在と無』 がちがち

仏：L'Être et le néant ほわーん

英：Being and Nothingness で？

独：Das Sein und das Nichts ごちごち

西：El ser y la nada さらさら

＊

「あるとない」と「有ると無い」と「存在と無」は、同じことを言っているというのは抽象です。それぞれが違います。

「あるとない」 < 「有ると無い」 < 「存在と無」

「存在と無」は「あるとない」よりずっと厳めしい、つまり存在感があります。難解な印象を与えますし、実際に難解でもあります。なにしろ、「ないことはない」という振りをして「ないことがある」とほのめかしているのです。これって「いや」が「いいわ」だったりするSMプレイとそっくりじゃですか？

\*

漢語系の言葉や漢字は、「ない」を「ある」ようにほのめかします。これは顔の問題だと思います。文字には顔がありますが、漢字のいかめしさはすごいです。漢語系の言葉を使うと頭が良さそうに見えるし、すごいことを言っているように見えます。

字面が強面だとも言えそうです。ないはない、ことばはことば、ことばはものではない。こういう身も蓋もない、がっかりするしかないほど明快なこと（事実とか真実ではありません）を「無は無なり」「言葉は言葉である」「言葉は事物ではない」と漢語系の言い回しで言うと、とたんに「ないはある」の振りをしてしまうという事態が生じます。がちで「ある」ように思えてしまいますのです。いわば顔芸です。てか、顔芸と言わずに何と言ったらいいのでしょうか？

あるあるあるあるある  
あるあるあるあるある  
あるあるあるあるある  
あるあるあるあるある  
あるあるあるあるある

無 = あるあるあるあるある.....

「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまうとか、「無」に「ある」がびっしり詰まっている気がすると言えば、分かっただけなのでしょう。漢字や漢語には何だか「思い」がつまっているようで「重い」のです。ただし、あくまでも日本語においての話です。日本語における漢字の感じを問題にしています。また私という個人においての話であることは言うまでもありません。ひとさまのことは知りません。私にはこんな話のできる友達がいないのです。

\*

漢語はないことをあると思わせる（におわせる、ほのめかす、ふりをする）日本語における仕組みではないか、なんて思ってしまう。無い無い、無無なんていくら言っ

でも、あるあると暗にほめかしているのです。

今回の小話ですが、もし大話、あるいは重い話、はたまた厳めしい話に見えたとすれば、顔のせいです。内容のせいではありません。内容は無い様なのです。文章は字面が命。人形——ひとがたと読んでください——は顔が命。



音と声があるだけ、音と声の流れがあるだけ





＊

外国語の歌で覚えているものはありませんか？ 意味はよく分からないのだけど歌える、そんな歌がないでしょうか？ 全部じゃなくて、ほんの一部だけでもいいですよ。

とういんこー、とういんこー、りーろすたー。おぶらでい、おぶらだ。けせらせら。ふにくりふにくら。

意味がないものとして耳に入ってきた。とにかく聞こえた。とにかく耳に入ってきた。そんなふうにして覚えてしまったのではないのでしょうか？

音だけで覚えている外国語の言葉。音だけ。意味不明。たぶん意味は後で分かる。あとになっても意味が分からないものもあるにちがいません。

＊

「歌えるけど意味は分からない」、「聞こえているけど理解して聴いていない」、「歌詞を読むには読めるのだけど意味があいまいだ」という感覚。外国語だけではない気がします。歌だけではない気もします。

べつに特別な体験ではなく、誰もが経験してきたし、いまでも日々経験しているのではないのでしょうか。

子どものころに、次のような経験をしたことがないのでしょうか？

夜、床につく。目がさえて眠れない。近くで、あるいは、隣室から大人たちの声が聞こえてくる。耳をそばだてると、話の内容がはっきりと分かる。

誰かの噂話をしている——。その誰かは、知っている人だ。へえー、あの人、そんなことやっているんだ。あんな顔をして。ふーん。えーっ、すごい。

そのうち、眠気が訪れる。噂話には興味があるけれど、どうでもよくなってくる。

聞いている。聞こえている。聞いている。聞こえている——。そのうちに聞こえてくるのが、言葉ではなく、音、音楽、旋律のように感じられてくる。そして意識が薄れる。眠りに入る。

そうしたことが、ありませんでしたか？ いまでも、同様の経験ができるはずですよ。

\*

音、音楽、旋律のように聞こえる言葉。

話し言葉の「意味が分からなくなってきた。でも聞こえる」は歌に似ています。歌を歌う時に、人は意味が分からなくなっていることはよくありますね。カラオケなんかで、あるいは合唱なんかで、意味が不明になっている状態を経験したことはありませんか。

聞こえているけど理解して聴いていない。音だけの言葉。音に節をつけたように聞こえる言葉。音楽や旋律のような言葉。

お寺で聞く読経の声（みたいなもの）。保育園や幼稚園でのお歌（みたいなもの）。校長先生のわけの分からないお話（みたいなもの）。教室で緊張しながら音読する国語の教科書の文章（みたいなもの）。夜中のラジオから聞こえてくる声（みたいなもの）。目の前でしきりに口を動かしている人の声（らしきもの）。

\*

ただ歌っているだけ。あるいは唱えているだけ。でもちゃんと間違えないで歌っているし、すらすら口から出てくる。そんな歌やそこそこの長さの言葉があるって幸せではないでしょうか。苦しい時にも、悲しい時にも、うれしい時にも、口から出てくる歌やフレーズがある幸せ。覚えている言葉がある幸せ。

死ぬ間際でも、その歌や文句を口ずさむことが可能なのです。眉根を寄せて意味を考える必要はないのです。

言葉は音。言葉は声。言葉は音声。言葉は意味を失う。もともと音や声に意味などない。文字と意味は後付け。

\*

寝際に、よく口をついて出てくる歌やフレーズがいくつかあります。頭の中でそれが鳴っているのですが、自分が歌ったり唱えているのか、誰かがささやいているのか、記憶が再生されているのか不明になります。鳴っているその歌や声には意味がない気がします。意味を考える余裕がないというか。

音と声があるだけ。音と声の流れがあるだけ。流れだけ。……だけ。

それだけでじゅうぶん。有り難いです。幸せであることだけは確かな気がします。



ごみは名詞に似ている



＊

自然界には名詞に相当するものはありません。これを実感するためには「ごみ」という名詞について考えるといいと思います。ごみは人工物だという考え方がありますが、名詞も人工物にほかならないからです。

朝配達されたものは新聞、読み終わると新聞紙。新聞紙は時間が経つと古新聞と呼ばれます。まだごみとは呼びにくい新聞や新聞紙であっても、古新聞や古紙になれば晴れてごみ扱いされます。

新聞、新聞紙、古新聞、古紙。まるで出世魚（むしろ降格魚でしょうか）のようですね。

日本語が読めない人にとっては、コンビニで売られている新聞は新聞紙でしょう。英語が得意ではない人にとっては、コンビニで日本語の新聞と並べられている英字新聞は新聞紙にちがいません。

新聞を読む習慣のない人にとっては、たとえそれが母語で書かれていても、新聞紙なのかもしれない。まだ目を通してもない新聞が新聞紙として扱われ、読む以外の目的で使われることは意外と多い気がします。

まちがって同じ新聞が二部配達されたり、手違いにより売店で二部買ってしまった場合にも、一方は新聞紙として扱われるでしょう。

＊

新聞、新聞紙、古新聞、古紙。同じものであっても、時や場合や人によって見方が異なり、異なった呼び名で指ししめされる。それが名詞の本質です。

たとえば、いま二人の人がいて、その二人の前に印刷されたばかりでインクの匂いのする紙があるとすると、その時点でその紙は「新聞」であったり「新聞紙」であったりする。つまり、どう見るか、どう呼ぶかの問題なのです。

さらにいうと、新聞の印刷工場で記事の差し替えが指示されたとたん、印刷されたばかりの新聞はただちに廃棄すべきものになる。それが出回っては困るのです。

ごみも同じです。ごみとは人にとって「ごみ」であったりなかったりする物であり、あるごみが別の人にとってはごみではなかったり、時間の経過やそれが置かれた場所によっても「ごみ」と呼ばれたり「ごみ」以外の呼び名で指されたりすることはざらにあるでしょう。

ごみが分別されることから分かるように、ごみとは分類なのです。分類は普遍ではなくローカルなもの——言語や文化や地域や立場やその時々<sup>の</sup>都合や個人によって異なります——だというのは、とくに分別がなくても分かる理屈だと思います。

新聞、新聞紙、古新聞、古紙。

ごみ、護美、ゴミ、塵、芥。

ごみは名詞に似ています。ごみも名詞もころころと変わります。ともに正体不明なのです。

ごみはレッテルであり、名詞の本質はべたべた貼ることにあります。何に何を貼っているのか、人には分からないみたいです。



短い反対は長いではないという話



＊

五感が響き合う、つまり五感を別個のものとは感じないというのは、誰もが何かの形で日々経験しているのではないのでしょうか。べつに超常現象とか神秘体験などではありません。そもそも人にとって五感は独立したものではないはずなのです。

言葉で、痛くなることがある。気持ちよくなることがある。せつなくなって涙がこぼれることがある。色が見えることがある。苦しくなることがある。においを感じることもある。むずむずすることがある。

言葉にうながされて、お腹が鳴ることがある。誰かの声ができるような気持ちになることがある。背中を撫でられたような気がする。足もとをすくわれたような感覚に陥ったことがある。体がほてってぼかぼかしてくることがある。

＊

ある種の文章や写真や動画を読んだり見ると性的な興奮を覚えることがありますが、これは誰もが経験することです。萌えたり（燃えたり）、催さないほうが変なのです。書き言葉つまり文字や形つまり映像が快楽へと変換されるわけです。書き言葉や形や模様（視覚）が交換機を経て別の言葉（身体という知覚の総体）に翻訳されると考えてもよさそうです。

こんなふうに五感の一部が別の五感やその一部へと翻訳されると考えると、何かの仕組みが働いているような気がしてきます。まるで装置とか機械みたいじゃないですか。

印刷物であれば紙面のインクの染みでしかない活字や文字や画像、スマホやPCであればディスプレイ上の画素の集まりである活字や文字や画像。そうした物質が視覚という仕組みをとおして人（脳と言ってもいいかもしれません）を刺激した結果でしょうね。

人はインクの染みや画素を錯覚して「あそこ」だと思い込むわけです（「あそこ」が「どこか」は人によって異なります、人それぞれ）。錯覚を知覚と言い換えても大差ありません。いずれにせよ、錯覚の利用はヒトにとって素晴らしい発見あるいは発明であり性癖なのです。

＊

性的な快感は性的と言われている器官だけで感じるわけではありません。五感を動員した行為です。

視覚：表情、身振り、仕草、目くばせ、目つき、皮膚や肌の汗、動き。

聴覚：声、音（詳しくは書きません、想像してください、それが大切でありむしろほのめかすことで何かが伝わるがあると思います）。

味覚：味（汗や唾液の味とか.....）。

嗅覚：におい（匂い、臭い、いろいろありますね、もちろん相手のつけている香料のにおいや部屋のにおいも重要な働きをしますね）。

触覚：肌触り、皮膚と皮膚、粘膜と粘膜（いやらしくて済みません）、手触り、足触り、部屋の温度を皮膚で感じる、腹部と背部と頭部では皮膚的な感覚が同時にまちまちのことがある、痒み、痛み、（痛点での皮膚的な痛みのことです）、あと振動や揺れ（いやらしくて恐縮です）も触覚で感じる気がします。

想像してみてください。性行為は五感を総動員した体験であり出来事ではないでしょうか。

＊

話は飛びますが、あなたは「あれ」が好きですか？ あなたは「なに」が好きでたまらないでしょうか？ とうとつに意味深な質問をして、ごめんなさい。いろいろ想像してしまいますよね。

あれ、それ、これ、なに。

何だかいやらしくないですか？ こういうのは、恐怖や不安という感情でも同じで

す。スティーヴン・キングの大作『IT』を思い出しましょう。

アルファベット二文字の it (一音節) がすべてを語っているのです。日本語でも「あれ、それ、これ、なに」というふうにした二文字 (二音節) ですね。ずばり名指すよりも、あるいは長々と言葉を費やすよりも、「あそこ」とか「ちよめちよめ」とほのめかすほうが、ずっと〇〇いのです。

言葉の世界とは違って、短い反対は必ずしも長いではないのが現実界なのです。なんてめちゃくちゃに短絡したくなります。鼻の下が長いわりには、意外と短気なのです。

現実では短い反対は長いではないというのは、言葉はどんなに頑張っても (じっさいに頑張るのは人ですが) 現実には追いつけないことの比喩であり象徴だとも言えそうです。言葉はつねに「足りない」「抜けている」「まばらである」という意味です。だから、人の錯覚に期待するしかないのです。

\*

言葉は交感。言葉は交歓。言葉は交換。言葉は交換機。言葉は翻訳機。

ここまでに言葉言葉とずいぶんたくさん書きましたが、言葉が言葉をやめた瞬間に、言葉から快樂が立ちあらわれるような気がします。



正々堂々と出あってしまえばいいのです





＊

やっぱり見えます。人の顔です。似た人を知っています。何を見ているのかと申しますと、天井の染みなのです。二十年以上前から、そこにあります。何度見たか知りません。やっぱり見えます。見ないつもりでも、見てしまいます。

よく考えれば、テレビも、映画も、写真も、絵も、パソコンのモニターも、「それ」そのもの」ではないにもかかわらず、「それ」を見てしまうという錯覚を利用したものです。でも、それは意図的にそうなっているのであって、不意に出あってしまうという体験をしているわけではありません。

それなのに、出あってしまう。出あってしまった。出あってしまうだろう。出あってしまうかもしれない。そんなことがあります。人をやっている以上は、あります。何かには何かを見る。これって、人である限り仕方がないみたいです。ネガティブに、つまりマイナス思考で、とらえることはないのです。

たとえば、不意をつかれたとしても、正々堂々と出あってしまえばいいのです。

そういう体験の恥ずかしさや後ろめたさやかっこ悪さや不安を、薄めるためのいい言葉、つまりおまじないの言葉があります。それは「あらわれる」です。

「○○が出る・出た」とか、「○○が見える・見えた」の代わりに「○○があらわれる・あらわれた」と、するだけでいいのです。「見える・見えた」が自分の責任なのかどうかは、誰にも分からないと思いますが、とにかく責任を転嫁するのです。

それは「出た」のでも「見えた」のでもなく、「あらわれた」のです。思うだけでなく、ちゃんと声を出して唱える。それだけで、だいぶ気が楽になりませんか？

このように言葉は、ときとして人を助けたり救ってくれます。あの天井の染みのなかに見える人の顔は、「あらわれている」のだ。そう思うと、気持ちがいくぶん、やわらぎます。

ところが、同時にぞくっとくるのです。こっちに落ち度はない。責任はない。そこまではいいです。じゃあ、なぜ？ でも、なぜ？ なぜ、「あらわれる」の？

責任だか何だか分からないものを転嫁した、つまり押し付けたのはいいけれど、その「押し付けられたもの」あるいは「押し付けたこと」が気になってくるのです。なぜ？ どうしてなの？ 何が起こって、そうになっているわけ？

こういうことは、深く考えることではなさそうです。考えてみても、いいことなど、これっぽっちもないみたいだからです。だから、安心してください。あなたに責任はありません。

同床異夢、異床同夢



＊

寝入るとき、人はとつぜん一人になります。二人で抱きあって寝ていたとしても、眠りに入った瞬間に二人は別れます。どんなに愛し合っている、二人いっしょに眠りの中にいることはできません。

お墓とはちがうのです。そんなの、嫌ですか？ 悲しいですか？ お風呂もベッドも夢も、いっしょじゃなきゃ嫌。せっかく生きているのに。人生の三分の一は眠っているというのに。

お風呂はお墓に似ている、と書いた作家は誰だったか？ それとも、浴槽は棺桶に似ている、だっけ？

そういえば、トイレで縦長のドアが並んでいるのを見るたびに、縦に並べたお棺に見えると語った女性を思い出しました。女性専用のトイレに入ったことがないのに、妙にリアルに感じたのを覚えています。

詩を書いていたあの人にまた会いたいです。夢でもいいから。

＊

一人でいる時がいちばん安心できる人もいます。ここにも、ひとりいます。さらうなら、寝る時くらいは一人でいたいと願う人間でもあります。もちろん私のことです。

それにしても、同床異夢とはよく言ったものですね。四字熟語として使われるさいの比喩的な意味ではなく、文字通りに意味を取りましょう。同じ寝床で寝て異なる夢を見る、です。

同床異夢。話をややこしくしなければ、当たり前に近い至言かもしれません。多くの  
人にとっては残念で悲しい至言ということでしょうか。

＊

同床異夢、同床同夢、異床同夢というぐあいに、漢字を入れかえて遊んでみたくなり  
ます。文字が意味とイメージの塊なので、ブロックや積み木みたいに遊べるところが漢  
字の熟語の醍醐味です。

並べ替えてもそれなりに意味ありげに感じられるのは、漢字の造語力が優れているか  
らでしょう。

造語といえば、言界、現界、幻界、弦界、絃界——。こんなふうには自分語をつくっ  
て楽しんでいます。「げんかい」と読める「二語熟語」が十個あるのです。

「同床同夢」と「異床同夢」をネットで検索してみると、同じような遊びをした例がヒッ  
トし、その中で「藤枝静男」という名前を見つけてはっとしました。

あまりよく知られた名前ではありませんが「藤枝静男」という作家がいて、その人の  
書いた『異床同夢』というタイトルの作品および作品集があるのです。

同床異夢は当然のことですが、異床同夢となると、これは摩訶不思議な話になりま  
す。魅力的な作品名でもあります。残念ながら藤枝の『異床同夢』は読んだことがあり  
ません。

どんなことが書いてあるのでしょうか。その文字を見たときにイメージが湧いて、た  
ちまちそれが膨らんでいきます。藤枝の小説のタイトルで好きなのは、『犬の血』『異物』  
『私々小説』『出てこい』『虚懐』『空気頭』です。作品自体も好きです。

異床同夢、つまり違う——あるいは遠く離れた——寝床で寝ているのに同じ夢を見る  
話を描いた小説や漫画や映画は多いです。ストーリーの浮かびやすいテーマなのでしょ  
うか。

＊

未読の書名を見て、その内容をあれこれ想像するのが好きです。本を読むよりも好きなのですが、このところその傾向がさらに強くなってきました。

タイトルだけ、またはその本の宣伝文句や簡単な解説を読むとぞくぞくします。架空のというか仮想の内容があれよあれよと浮かんでくるのです。

私の場合には、書評は長すぎて興がそがれます。本の中身を想像するさいの邪魔になるのです。

長年購読している新聞は中小の出版社の広告が多くて、起床後に第一面のいちばん下を見るのが楽しみでなりません。二面、三面の下のほうだと大手の出版社の広告が掲載されています。

推しはなんといっても第一面の広告なのですが、読書面のある土曜の朝刊では、零細な出版社の広告や出版情報が載っていてわくわくします。

きょうは土曜日。寝苦しい夜でしたが、胸のときめく朝のひとときを過ごすことができました。頭の中は想像——むしろ空想と妄想と言うべきでしょう——でいっぱいです。





あーむ。



＊

「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」について書いてみようと思います。「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」という音あるいは文字の連なりで、みなさんは何を連想なさいますか？ 個人的には、言葉とうんちと人間を連想します。

この「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」三者は、密接に結びつきからみ合っただまに、「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」状態にあるように感じられるのです。

＊

言葉というと、阿吽（あうん）という言葉が頭に浮かびます。あ、うん。あっ、うん。ああ、うん。この阿吽という言葉は、含蓄に富む言葉のようです。中には、阿吽という言葉テーマに蘊蓄（うんちく）を傾けた文章をものする方もいらっしゃるにちがいありません。

こじつけや駄洒落や出まかせやでたらめが好きなた者としては、いま、わざと、あるいは、ひょっこりと出てきた「あうん」という言葉について、いろいろな加減なことを書きたくてうずうずしているところです。

きっと頭の中が「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」しているからでしょう。その「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」を、ちょっと出してよろしいでしょうか。すっきりさせてください。けっこう、マジなお話ですので、どうかお許し願います。

＊

「あうん・あーむ・おおん・おーむ・おうむ・aum・om」という、言葉とも音とも言えるような言えないような声の出し方があるそうです。どこかでは「聖なる音」らしいのですが、詳しいことは知りません。

「阿吽・あうん」という言葉を見聞きするたびに、個人的には、あいうえお表を連想します。「あ」から始まって「ん」で終わるといふ、単純な理由なのですが、その単純さゆえに、かえって深いものを感じてしまうのです。

ここで、みなさん、「あーん」と口にしてみてください。さあ、恥ずかしがらずに、ごいっしょに、「あーん」。

「あ・a」は、大きく口を開けて息を吐き出す音ですね。「ん・n」は、口をかすかに開いたまま、上の歯の裏から奥にかけて（硬口蓋というそうです）、舌をぴったりとくっつけて、鼻から息を出しながら出す音です。

でも、個人的には、「m」、つまり、両唇を合わせて閉じて、鼻から息を出す「む・mu」の「u」なしの構えで出す音で読んでいます。そうすると、「あーむ」という感じになります。さきほど触れた、aumとかomとかいう、聖なる音とは関係なく、何となく、このほうがしっくりするので、そう読む癖がついています。

＊

あいうえお表のうちの、「あ・a」と「ん・m」だけを、よく口にします。じつは、二回に一回は、ただあくびをしているだけなのですが、マジに「あーむ」と声に出すことがあります。

伸ばしぎみにゆっくりと発音しながら、何度も繰り返します。すると、「あ・a」と「ん・m」の二つはつながり、連続した音になります。目をつむって声に集中すると、口と鼻という名の穴を通る空気の流れと、鼻の奥の震えだけが感じられてきます。そのうち、眠くなります。

人間は口を開けて「a」と言っとうまれて、「m」または「n」の口をして息を吐いてなくなる。そんな思いにとらわれます。本当のところは知りません。ひとさまが生まれる場にも（自分のことは忘れました）、死ぬ場にも立ち会った経験がないからです。

人間一般どころか、自分自身に関しても、どうなのかは知りえません。なにしろ、生まれた時の記憶はありません。これから先、いつかは死ぬのかもしれませんが、その時に自分がどんな口をして死ぬのかは知るよしもありません。

あーむ。

いまのはあくびなのですが、あくびは「生きて死ぬ」という行為のレビュー（復習）であり、リハーサル（予行）だという気がします。ワンちゃんも、にゃんこも、ネズミさんも、クマさんも、あくびをしますね。興味深いです。敬虔な気持ちになります。



「あなた」は、短すぎない、長すぎない、重すぎない、  
軽すぎない





＊

「あなた」という人称代名詞が好きです。あなた（かなた）・彼方・貴方（貴男・貴女）。こんなふうに書けますね。どういふことなのでしょう。簡単に説明すると次のようになります。

「向こう」とか「遠く離れて」の「あなた・かなた・彼方」から転じて、「(向こうという意味の) あっち」とか「(向こうにいる) あのかた」となり、「you」の意味の「あなた・貴方（貴男・貴女）」が生まれたらしい。

いちばん大切なことは、「あなた」という言葉に、「遠く離れた愛しいあなた」という意味が込められていることです。「遠く離れて」と「あなた（貴方）」が二重写しになっているわけです。

これを、「あなた」＝「without you」& 「I love you」& 「I miss you」説といいます。「あなた」に三つの英語の意味が含まれているなんて、すごすぎます。

＊

いまは半分冗談半分本気ですが、好きで好きでたまらない人が遠くにいたら、寂しいですね、切ないですね。一方で、好きで好きでたまらない人が近くにいても、愛おしさで胸が苦しいのではないのでしょうか。恋愛にしろ、友情にしろ、家族間の愛情にしろ、そういう気持ちになることがありますね。

会ったことのないアイドルやスターやアーティストでも、または小説やテレビドラマやアニメや映画の登場人物、つまりフィクションに出てくる誰かやキャラクターでも、あるいは空想や妄想の相手であっても、そうした感情をいただくのではないのでしょうか。

遠くにいる「あなた」、遠くにいると感じられる「あなた」——。「あなた」は、愛おしくてたまらない相手との空間的な距離感だけでなく、心理的・精神的な距離感をも含む呼びかけの言葉なのです。「あなた」は、そういう「離れた」相手に向かって叫んだり、ささやいたり、歌ったりするのに最適の言葉だと言えるでしょう。

＊

「あなた」の二重の意味を離れて、「あ・な・た」という音に注目してみましょう。「あなた」は単独でも歌になります。つまり旋律になります。みなさん、「あなた」と声に出して言うてみてください。発音してみてください。

a・na・ta

母音の中でも明るく強く響く「a」が三つありますね。ゆっくり、やや大きめの声で、「あー、なー、たー」と伸ばし気味に発音してみてください。綺麗な音じゃありませんか。しかも優しい。ささやいてもいいでしょう。甘えた感じで口にするのもいいでしょう。

「あなた」は三音節でしかも「a」が三つあるので、歌い上げるのにも適していそうです。ゆー、うー/とう、じー/どー、にー、とう/うすてっ——。どれも短いです。「あなた」は、短すぎない、長すぎない、重すぎない、軽すぎない。すごすぎです。

＊

「あなた」には、名前のような響きさえある。「anata」のように、トリプルエー、つまりaaaと母音が三つ続く名前が——少ないですが——あります。たとえば、あらた、さやか、わかな、まさや。

誰かがあなたに「あなた」と声をかけたとします。名前を呼ばれたような気がしませんか。そんな存在感のある言葉だと思います。

a・na・ta

「a」という母音を発音するためには口を大きく開かなければなりません。心を開く母音とも言われるゆえんです。これが三つあるのですから、素晴らしい作りの言葉です。

歌詞に「あなた」が出てくる曲は実に多いです。十曲のうち、八曲くらいはある気がしませんか。しかも、「あなた」という言葉を歌い上げるような曲も少なくない感じがします。

\*

人と人との間には距離があります。好きあっている同士でも一心同体は夢でしかありません。というか、同床異夢という言い回しの本来の意味とは違いますが、いっしょに寝ていても二人が同じ夢を見ることなどまずないでしょう。

たとえ、恋人同士や夫婦間や家族間であっても、距離は避けられません。誰もが基本的には「別人」という意味での「他人」同士なのです。とはいえ、いや、だからこそ、愛していればいるほど、その距離を埋めたくなるのが人間なのでしょうね。

「あなた」という日本語の言葉には、「遠く離れた愛しいあなた」という意味が込められています。美しく哀しい言葉——。

ひらがなの「あなた」を「彼方、貴方」と表記すると、その美しく哀しい二重の意味が立ちあられます。まるで魔法のようではありませんか。

生きている——あなたがその文字を口に息として放って初めて生きるのです——としか考えられない言葉の身ぶりや表情。そんな表記のできる日本語が大好きです。



出たものは「静止」してはいないという話



＊

言葉とうんちの共通点について考えてみましょう。

言葉とうんちは共に、体にある穴から出てくる。これは確かなようです。口と肛門という穴は、人間およびほかの多種多様な生き物にとって、生存するためには不可欠とも言える器官です。

「阿吽＝あうん＝あーん＝あーむ」の「あ」が口だとすれば、「ん＝む」は肛門にたとえてもよろしいかと思います。人間は「あー」と産声をあげ、「ん」とか「む」という口の形をして「なくなる＝亡くなる＝無くなる」。

肛門から出たものが土や水に返り、生命の一部となり、その生命が口に入る。そして、また出る。こうなると、人間だけの話ではなく、この惑星の生態系レベルの、壮大で美しく神秘的でもある「叙事詩＝フィクション＝お話＝作り話」につながりそうです。あな、不思議。anananananana……。まあ、不思議。mamamamamam……。まま、まんま、まー、まーむ。ままー、まんま。とめてくれるな、おっかさん。南無。

＊

で、肛門から出てくるうんちですが、個人的には次のようにイメージしております。

- ・「自分」と「他者＝世界」の「間（＝ま・あいだ・あわい）」で、ぶかぶかと浮いている。
- ・「出る」とは、「出た」後には、「ぶかぶか浮いている」状態に落ち着く。

このイメージにおいては、躍動感までは行かない浮揚感（＝運動）つまり「ぶかぶか」が非常に重要です。

- ・出たものは「静止」してはいない。

この点に、注目していただきたいのです。「でる・出る」に似た言葉で「あらわれる・現れる・表れる・顕れる」があります。でも、両者は微妙に異なっているようです。まず、「出る」から、具体的に見ていきましょう。次に「〇〇は出る」という言い方を「〇〇」を挙げ、いったん「出た」後にどうなるかを考えてみましょう。

いったん「出た」ものは、必ず、何らかの運動に誘発されます。たとえば、いったん「出た」給料も、給付金も、保険金も、うんちも、太陽も、月も、声も、にきびも、幽霊も、新刊書も、選挙候補者も、テレビドラマの役者も、家出したお父さんや、家出したお母さんや、家出したお子さんも、火も、くいも、そのまま静止し続けることはありません。

一方、「〇〇はあらわれる」という言い方を「〇〇」を挙げ、いったん「あらわれた」後にどうなるかを考えてみます。

いったん「あらわれた」ものは、「出た」ものとは異なり、静止したまましつこく居座ることも、往々にしてありそうなのです。真価、効果、正体、正義の味方、英雄、悪の権化、〇〇の神様、救世主、影響、才能、成果、結果などです。もっとも、影響や結果みたいに、「出る」とも言うものは、概して「不安定」な気がします。

いったい、何を言いたいのかと申しますと、次のようになります。

・言葉は、うんちにきわめてよく似ている。

言葉とうんちについて、特に重要だと思われる共通点を挙げます。

1) 「あらわれる」のではなく、「出した」結果「出る」ものである。

2) いったん出た後には、長い目を見た場合、じっと静止していることなく、ぶかぶか浮遊するという運動に至る。(※「うんちの化石をテレビで見たぞ」というお言葉に対しては、たとえ、静止して化石化するとしても、化石に至るまでには内部で化学反応など分子レベルや原子レベルでの「運動」が生じるという屁理屈を用意いたしました、念のため。)

3) 出た後の「浮遊＝液化＝気化＝運動」は、「宙ぶらりん状態＝宇宙を支配する偶然性」とほぼ同義である。簡単に言うと、どうなるかは未定の状態に置かれるという意味です。行方不明にもなり得ます。



4) 人は誰もがうんちをし、また、誰もが広義の言葉を発するという意味で、うんちも言葉も、ヒトという種におけるの普遍性をそなえている。【※「広義の言葉」としたのは、言葉は話し言葉だけに限らなく、手話、ホームサイン、点字、指点字、表情、目くばせ、合図、仕草なども含むという意味です。】

5) ぐちゃぐちゃごちゃごちゃしている。

以上五つの点が、共通しているように思われます。



ぎらい



＊

ジャンルぎらい。これはあるように思います。あるレッテルでくくられるのが好きではありません。くくるのも苦手です。これまでの人生においても、くくられるのが嫌で、はみ出し、ずっと端っこにいました。隅っこ暮らしが長いのですが、このまま終わりそうです。

ストーリーぎらい。というよりも、ストーリーが苦手なんだと思います。童話にしる漫画にしるテレビドラマにしる映画にしる小説にしる、そのストーリーを語れるものがひとつもないのです。誇張やレトリックではありません。

ですから、小説なんか一度まばらに読んだものを、まだらにながめています。ところどころに好きな文字や文字列があるので、順不同でそこだけを見ているのです。いい気持ちになります。読むというより見ているのですから、こうなるともう顔をながめているのと同じです。文章は字面が命。人形（ひとがたと読んでください）は顔が命。

＊

小説を書こうとしているのですが、悩むのがジャンルとストーリーです。なんでも書いていいのが小説だという言い方があります。勇気づけられる言葉ですが、それでもジャンルとストーリーが要求されそうで腰がひけます。

いま「腰がひける」と書きました。これは一種の熟語のようです。決まり文句や紋切り型ともいいます。「および腰」「尻込み」もそんな感じがする言い方です。「気後れ」はニュートラルなほうでしょうか。よく分かりません。

型や定型やパターンというのは言葉をつかう以上、避けられません。絵や音楽でもそうでしょう。ある型やジャンルがあって、初めて創作が成立するのかもしれない。先行する作品を真似ることで、そのジャンルが熟していくのでしょうか。

＊

春が来た。水が来た。そして少女はきれいになった。

でたために並べた言葉ですが、どこかで見聞きしたような気がしませんか。たしかにそうなんです。寄せ集めなのです。引用ともいいます。これを詩だと言えば、詩に見えてきます。散文だと言えばそんな気もします。小説の一節だと言えば、なるほどと思ってしまうそうです。

詩であれば、現代詩、自由詩、自由律なんか、散文詩、ポエムなんてレットルや自称がありますが、上の三つのセンテンスを並べて、これがいま挙げた自称他称のどれだと言っても、なるほどと思ってしまう自分がいます。

小説であれば、ミステリー、本格探偵小説、ラノベ、純文学、私小説、メタフィクションというふうに、いろいろ自称他称なさっていますが、上の三つのセンテンスが、そのジャンルの小説の一部であると言われると、「ははあ」と納得してしまいそうです。

＊

川端康成の長編ではゆるやかな連作めいたつながりで書かれたものが多いといわれます。いまでこそ一つの本にまとめられています。各章の発表された時期に隔たりがあったり、最初に掲載された文芸誌に異同があったりします。

新聞に毎日掲載される形で章を積みあげていく長編の書き方をしていた夏目漱石とは異なりますが、この違いは大きいでしょう。両作家がそれぞれいただいていたテーマや資質や、経済的事情（意外とこれのせいらしいです）の違いとも大いに関係がありそうですね。

川端の「長編」を読んでみると、たしかにそれぞれの章が独立した小説として読める気がしないでもありません。登場人物が同じで、前に発表された章のストーリーを讀んでいなくてもなんとなく読めてしまうのです。

いいなあ、と思います。

＊

古井由吉となると、がっちりした長編もありますが、自由自在に書いている雰囲気  
が濃厚で、薄いながら濃い、濃いのに薄いと感じてしまいます。個人的な思いな  
のでしょうけど。

エッセイ、随想、小説、書評、散文詩のどれにも当てはまりそうな細部や断片から  
成る作品が多い気がします。このコラージュ性は藤枝静男の晩年の作品にも感じ  
ます。

いいなあ、と思います。

＊

要するに、とりとめのないものが好きで、たとえとりとめがあったとしても、そこ  
にとりとめのなさを勝手に感じたり、勝手に求めてしまう、そういうことだと理解し  
ています。

こういうのは思いこみとか自己暗示なのでしょうが、ジャンルや型を成立させている  
根っこにも、これと似た心理がある気がします。そう思う、そう信じる、そう決める。  
ひとりでは無理ですが、同調する人が集まると、幻想は社会的な運動になります。

いずれにせよ、とりとめがないものにこだわっているかぎり、ジャンルやストーリー  
には近づけないみたいです。

＊

ゆるやかにつながる長めの小説を書いてみたいのです。

長編とまではいなくても、そこそこの長さのある小説を構築するだけの構想力すら  
ないと見限ったところに、川端康成のいわば連歌形式（比喩です）の連作を見習おうと  
したことがありました（そういえば初めて書いた小説もこの形式でした）。とりとめなさを  
勝手に感じたからです。

いきなり新作を書くのもしんどいので、そうやってできた長めの旧作を加筆してみようなどと姑息なことを考えています。

一編一編が独立した掌編として読めて、それを合わせるとそこそこの長さの小説になる。欲を言うと、どこで終わってもいいし、どこから読んでもいい——。そんなのあるわけがないのは承知のうえで、やってみます。長年の夢なのです。



夢にうつるまでのあいだ



＊

初めて目にする影、初めて鏡を覗きこむ、初めて覗くカメラのファインダーの像、初めて写真に見入る——。思いつくままに並べたフレーズですが、どれもが「うつる」と関係あります。影に映る、鏡に映る、ファインダー越しの眼に映る、写真に写る。

こうした「うつる」を生まれて初めて体験したさまを想像すると、ぞくぞくしてきます。イメージが氾濫して気が遠くなりそうになります。「うつる」ほど始原的な身振りはない気がするからです。

口で「ふくむ」や、何かに「ふれる」、そして「きこえる」に加えて、生まれて間もない赤ん坊が経験する初めての身振りのひとつに「うつる」があるのではないかと想像します。

視覚的な「(目に)うつる」、つまり「みる」「みえる」だけにとどまらず、距離を体験する「うつる」もありそうです。要するに移動のことなのですが、「うつる」には距離が不可欠だと思われます。その距離とは、具体的なものであったり抽象的なものであったりする気がします。

こんなややこしい理屈は赤ちゃんには知るよしのない話ですから、もと赤ちゃんである、大人のたわごとにはすぎません。赤ちゃんも、もと赤ちゃんのあいだにも、抽象的な意味での距離がありそうですね。

＊

ここからあそこへうつる。これをあれにうつす。あれがこれにうつっている。わたしがあなたにうつる。あなたがあのひとにうつる——。寝際にこういうふうに言葉を唱えるのが好きです。わくわくもします。熱中すると、眠りに入れなくなる恐れがあるので気をつけなければなりません。

いま並べたフレーズを漢字をまじえて唱えようとする、とたんに難しくなります。文字が介入することで考えこむからでしょう。意味を分けなければならないからです。写か映か移か遷か、分ける——。音だけならイメージで唱えていればいいのに、漢字をまじえると邪念が入ります。漢字の字面の厳めしさに緊張もします。

昼間は邪念と緊張だらけのうつつ（現実）で生きているのですから、寝入る時や、夢の中ではせめてリラックスして自由でいたい。曖昧で荒唐無稽で、何でも肯定されるのが夢。夢は肉親以上にやさしいかもしれません。何でも肯定されるとはいえ、何でも受け入れてくれるわけではありません。夢は一方的に展開するのですから。

当たり前ですが、覚めたり醒めているわけにはいかない夢。それとは対照的に、漢字には覚醒させる力がそなわっている気がします。漢字を見ていると、なんか、こう、しゃきっとするのは。幸か不幸か、私の夢には漢字が出てきません。文字自体があまり出てこないのです。言葉が出てきても、音だけ声だけみたいなのです。よくは覚えていないのですけど。

これもまた当たり前の話ですが、ラジオには文字が出てきませんよね。夢の中の言葉はそれと似ています。視覚的でもある夢ですが、夢で文字を見た記憶はあまりありません。たぶん個人的なものだろうと思われま。

\*

ゆめをうつす、ゆめにうつる、ゆめがうつってくる、ゆめへとうつりたい、ゆめうつつからゆめにうつる、なにかがのりうつるのがゆめ、うつってくるのはゆめかもしれない。

(試しに、漢字を出してみます。ゆめにうつる、夢に移る、夢に映る、夢に写る……。どれも言えるような気がするけど、どういう意味なのだろう、そもそもどんな状態なのか？ やっぱり、頭がさえてきて眠れそうもありません。)

眠りと夢にうつるまでのあいだが寝際ですが——夢を見ないこともあるでしょう——、寝際には辞書も用字用語集もつかえないし、ネット検索もできません。これまで生きてきた言葉との付き合いがあるだけ。その付き合いすら、そこではうつりつつあり、うつ

ろです。とりとめのないイメージの断片の浮遊と、記憶との対話があるだけの、ゆめうつつ。

こうした心境は死に際にもありそうですね。もちとん頭と体の状態次第です。その時まではできるだけ元気でいたいですね。いい体調で臨みたいものです。まさか、それは贅沢というもの。かなわない夢であることはまちがいなさそうです。



人面〇〇





＊

仮面と人形の共通点は何でしょう？

難しく考えないでください。両方とも、「人面○○」や「何かに浮かんで見える○○像」の一種、または「人面○○」や「何かに浮かんで見える○○像」のチャンピオンみたいなものだと考えてみましょう。

「人面○○」や「何かに浮かんで見える○○像」とは、トイレの壁の模様とか、天井の染みとか、池の鯉とか、川辺に転がっている石とか、写真の隅っことか、車を正面から見たときなんかには、人間の顔や姿や形を見てしまうことです。錯覚と言えば錯覚だし、神秘と言えば神秘です。

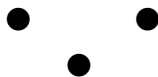
人面○△○

○ ○

人

面

三点そろえば人面の条件が満点だと心理学かなんかの本で読んだことがあります。



三点だとなんだかワンコみたいですね。



個人的には二点で十分だと思います。

＊

仮面やお面、そして人形やキャラクターなどは、そのものズバリ、人が意図的に人間の顔や体を真似て作るものですね。

もとは、ラスコーやアルタミラの洞くつの絵みたいに、土の壁なんかには人の顔や形、あるいは狩りの獲物の動物などを描いていたのでしょうか。それとも、人の顔や形に似ている石ころや岩や木切れを見て少し細工してみたり、土や砂や粘土で顔や形を作って、「ほほーっ」とか「ぎゃははーっ」とか「ひえーっ」とか叫んで、騒いでいたのでしょうか？

そういうのが高じると、人形やお面に行き着くって感じがしませんか？ 人形と言えば、ひな祭りが頭に浮かびます。おひな様も、男女の内裏びなだけを飾るごく質素なものから、ひな壇とセットになっている車一台が買えるくらいの豪華なものまであります。

＊

お面の場合には、能面ぐらいになると、かなり高価だし、国宝級のものもあります。また、世界中の人たちが、さまざまな素材のお面を作っています。

「面」という言葉に、とても興味を持っています。「面」は「かお」や「つら」のことです。「人形は顔が命」という言い方があるくらいですから、人にとってはとても大切なものだという気がしてなりません。

もしも、あなたの目の前に、いきなり人の顔が「にゅーっ」と出てきたら、不気味ですよ。顔って、自分自身の首の上にもあるのに、実に気味が悪いんです。だから、「人面○○」で大騒ぎしたりします。キリストやマリアの像や、観音像が何かに浮かんだとって、大騒動になる場合もあります。なぜでしょう？

顔から考えてみます。個人的な意見を申しますと、顔＝面＝皮膚＝皮で、「厚みがない」「薄っぺら」だからだと思うんです。言い換えると、実体がないみたいに見える。まるで幽霊です。のっぺらぼうのお化けです。

また、ぺらぺらだから被ることができます。身にまとうことができる被り物です。つまり、自分でないものに「化ける」ことができる。逆に言うと、目の前に見えるものが、本

当は「何か別のもの」が「化けている」ものなのではないか、とも考えられるわけです。

＊

こういうのを「表象の働き」とか「象徴の仕組み」とか呼んでいる人もいるみたいです。要するに、Aの代わりに「Aではないもの」を用いることなのです。言葉がそうですね。言葉は「言葉でないもの」の代わりに人がつかっているものです。単純に考えてください。本物の花の代わりに「花という言葉」をつかうという意味です。

お金も、表象＝象徴ですね。お金は価値の象徴だともいえます。したがって、その額によってさまざまなものの代わりになります。ほぼすべてのものがお金で買えるという意味では、お金はほぼすべてのものの象徴だと考えることもできます。最強の象徴、King of Shocho ではないでしょうか？

ぺらぺら、自分でないものに「化ける」ことができる。身にまとうことができる被り物。「厚みがない」「薄っぺら」、実体がないみたいに見える。まるで幽霊。のっぺらぼうのお化け。

そう思うと、お金ってすごいですね。おそらく実体がないのに何にでも化けるお金って、最強最大超絶倫でありながら最軽最短最薄最小のぺらぺら（つまりコンパクト）であり、のっぺらぼう（無記名だし出自も書いてない）なのです。だから、みんなが欲しがるのでしょう。私も欲しくてたまりません。

話が飛んでごめんなさい。



人に動物を感じる時



＊

## 動物、生物、宇宙人

動物園に人はいません。いるにはいるけれど、常時檻や柵の中にはいません。それは人が自分たちを動物と見なしてないからでしょう。

生き物や生物やいきものはどうでしょう。人は自分たちを生き物や生物やいきものと考えているのでしょうか。もちろん、これは日本語の語感の問題ですけど。

宇宙人はどうでしょう。人は自分たちを宇宙人と考えているのでしょうか。地球も宇宙の一部であるはずですよ。

## 知覚、五感、距離

目を向ける・見入る、耳を傾ける、嗅ぐ、ふれる・なでる、味わう・食感を楽しむ——この中で私がいちばん動物を感じるのは「嗅ぐ」です。人のことです。

視覚、聴覚、嗅覚、触覚・触感、味覚・食感のうち、視覚、聴覚、嗅覚では対象との間に距離が必要です。

触覚・触感と味覚・食感では、相手と接触していなければなりません。「する」側にも「される」側にも、「する」と「される」が同時に起きています。つまり、双方向的なのです。

## 痛みを推しはかる

一方的に、相手に知られずに、見る、聞く、嗅ぐ場合は多々あります。

【※あとで触れますが、この辺のことにとても意識的だった作家は川端康成だと思います。とりわけ『雪国』（ソフトでマイルドです）と『眠れる美女』『片腕』（ハードでワイルドです）です。】

「触れる・撫でる」と「味わう・食感を楽しむ」最中となると、もし相手に意識や意思があれば、されている相手は「されている」と感じているでしょう。

「撫でる・撫でられる」は想像しやすいですが、「食べる・食べられる」を想像するには心の痛みを感じます。たとえ、その行為の前に「いただきます」と手を合わせたとしてもです。

あれは相手の魂を鎮めるためではなく、自分の気持ちを鎮めるための儀式だと私は受けとめています。

相手が自分に「うつってくる（入ってくる）」と感じているからです。だから、二つの手を胸の前で合わせるといふ象徴的な動作をするのです。

亡くなった人を送ったり、亡くなった人と日々挨拶をするのと同じ仕草をしていますが、その意味あい異なります。なにしろ、この場合には相手はこれから自分に「入ってくる」のです。（※諸説あり）

いただきます。合掌。

もっとも相手の身になれば、そんな言葉や動作は慰めにもならないでしょう。相手が人の場合です。

相手が人以外の動物や生き物や宇宙人の場合だと、「食べる」側の人には心の痛みはあるのでしょうか。ただ相手の「痛み」（苦痛）だけがある気がします。

こればかりは、自分がされてみないと分からないでしょう。思いやる、おもんばか



る、忖度する、推しはかる、しかなさそうです。

## 身びいき、擬人

思いやる、おもんばかり、忖度する、推しはかる——これが得意なのは人かもしれませんが（人の思いこみである可能性が濃厚ですけど）。ただし、対象は人に限られるようです。

正確に言うと、対象は人というよりも、各人にとっての仲間や肉親でしょう。自分を含めた周りを見ているとそう思えます。どうしても人は身びいきします。

人は自分以外の動物や生き物だけでなく、無生物にまで「思いやる、おもんばかり、忖度する、推しはかる」心を向けることがあります。

人形、キャラクター、物語や小説や映画の登場人物（人物とは限りません）、アイドル（本人や実物ではなく映像や音声として立ちあらわれます）といった生きていないものにも、人は「思いやる、おもんばかり、忖度する、推しはかる」という行為でのぞむ場合が多々あります。

いわゆる擬人、つまり人以外のものを人に擬すわけです。

## 作意、作為

生き物の生態を撮影や録音したテレビ番組やネット上の動画や写真を見るのが好きです。好きなのですが、手放して楽しめない自分もいます。

撮影する側の視点や撮影者たちの存在を、つい考えてしまうのです。

これだけ接近した映像はどうやって撮ったのだろう。望遠だろうか、それとも接写か。この場面は長時間どころか長期間にわたってカメラを向けないと撮れないはずだ。どこで宿泊していたのだろう。お金もかかっているにちがいない。

そもそも、どういう意図があってつくられた映像であり企画であり番組なのだろう――。

こういうことを考えたり疑うようになると切りがありません。「疑心暗鬼を生ず」なのでしょうが、オブセッションになります。被害妄想に似て、しつこくてなかなか去りません。

### 意識的な擬人、無意識の擬人、深層的な擬人

生き物の生態を撮した番組では、ときどきショッキングな映像が流れます。前もって断りのテロップが出ることもあります。

「食べる・食べられる」は、たしかに見ていて気持ちのいいものではありません。

「食べる・食べられる」の場面を見ているとき、私はきまってヒトを連想します。

そうした行為がヒトの行為と重なるのです。雑食性のヒトは驚くほどいろいろな生き物を食べています。飼育や栽培までしています。

おそらく無意識のうちに、ヒトの行為と重ねようとして撮っているのではないのでしょうか。これは私の妄想でしょうけど。

直接、ヒトの行為を撮れないから、代わりにヒト以外の生き物たちのそうした行為を写しているとしか思えないのです。私の妄想でしょうけど。

鏡の前の体験のようです。ヒト以外の生き物の生態という鏡に、ヒトが自分の生態を「撮し・写し・映し・移し」見ているという意味です。

これもまた、生き物に自分たちを見る、つまり擬人なのでしょう。私は、意識的な擬人、無意識の擬人、深層的な擬人があるのではないかと考えています。

## 鏡の中の話だと意識する、意識しない

人は森羅万象に自分を見ているのではないか、意識的または無意識に擬人をしている、つまり自分自身を映しているのではないかと私は考えています。

たとえば、人形、キャラクター、物語や小説や映画の登場人物（人物とは限りません）、アイドル（映像や音声として立ちあらわれます）といった生きていないものを、人は人に擬します。

いま挙げた例は、どれもが人のつくったものであることに注目したいです。そもそも自分に似せてつくったのですから、一種のやらせなのです。

この場合には、人はある程度自分の擬人行為を意識しています。

ところが、自分のつくったのではないもの、たとえば生き物の生態を撮るとなると、とたんに自分が自分の視線で見ていることを忘れてしまいます。

まるで「ひとごと」のように見ているのですが——自分のことは柵に上げているとか、メタな視座に立ったつもりなのでしょう——、じつはそこに見ているのは自分自身だということに気づかないのです。

\*

どうということかと言いますと、現実や世界をそのまま写し取ることなどは不可能なのです。

言葉による描写であれ、映像をつかっただけの撮影であれ、必ずそこには枠があり——空間的なフレームと、始まり終わりという時間的な枠——、視点があり、色づけがあり、意味付けがあり、人工的な音響効果があり、筋書きがあり、テーマやメッセージがある、つまり写し取ったようで、じつは演出された作りものだという意味です。

描写や写生ではなく作画や創作だとも言えるでしょう。それなのに現実を裸眼で直接見て、それを写していると錯覚しているのです。

自分の見ているのは枠のある鏡の中の像であり、そもそも自分が鏡の中を覗きこんでいること自体を忘れてしまっているとも言えます。

言語——言語の基本は「Aの代わりにAとは別のものを見る」です——を持ってしまったために、不自然と反自然という生き方を選んできた人間は、自然を自然に見る術（すべ）を失ってしまったのです。

### 恥ずかしさ

「動物」園に人はいません。いるにはいるけれど、常時檻や柵の中にはいません。それは人が自分たちを動物と見なしていないからでしょう。

目を向ける・見入る、耳を傾ける、嗅ぐ、ふれる・なでる、味わう・食感を楽しむ——この中で私がいちばん動物を感じるのは「嗅ぐ」です。

視覚、聴覚、嗅覚、触覚・触感、味覚・食感のうち、視覚、聴覚、嗅覚では対象との間に距離が必要です。

＊

人は自分が見たり聞いたりしている場面を恥ずかしがることはあまりないでしょう。何を見たり聞いているかにもよりますが。

さわったり撫でたりするとなると、その対象次第では恥ずかしがるにちがいはありません。

味覚・食感については会食という習慣がある以上、個人差はあってもあまり恥ずかし

がるだろうとは思えません。でも、私みたいに恥ずかしがる人間が少数ながらいます。

恥ずかしいと感じる行為が私にはわりと多いようです。

## プライベートな行為、プライベートな仕草

においを嗅ぐ行為はどうでしょう。

「におい・匂い・臭い」「くさい・臭い」

においは生理現象と深く結びついていますね。汗、唾、腋臭、ガス、排泄物、体液……。  
(私はこういう文字を書いたり見ているだけで汗が出てくるタイプです。)

においを嗅ぐとき、人はその対象から目をそらして宙や空（くう）に、または斜め下に眼差しを向けることがあります。目を閉じることもあります。

私はそうした仕草にきわめてプライベートな「なにか」を感じてしまいます。そういう仕草をしている相手を凝視できないという意味です。見てはいけないものと言えいいのでしょうか。

そんなとき、私はその人に動物を感じます。同時に自分にも動物を感じます。

なぜなのかは、あまり考えたことがありません。考えないようにしているみたいです。

## においを嗅ぐ、鏡を覗きこむ

とはいうものの、もう少し「におい」と「嗅ぐ」について話してみます。

思い出したことがあるのです。

川端康成の『雪国』の最初のほうに出てくる、ある仕草なのです。

\*

透明ではなく透明感のある文体として、川端康成『雪国』の冒頭近くの文章を挙げてみます。特に取り上げたい例は、主人公の島村が、曇った汽車の窓ガラスに指で線を引く場面です。

——汽車の中で主人公の島村が左手の人差し指をいろいろ動かしたり、その指にまつわる記憶にふけったり、指を鼻につけてその匂いを嗅いでみるという、かなりエロティックな描写（猥褻な感じさえする）の後に、向かい側の座席の女（娘）が窓ガラス（手で押し上げて開ける窓）に映る。窓ガラスが鏡になるのだ。その窓ガラスの向こうに夕闇の中の景色が流れていく。窓という鏡に映った娘。窓の向こうに流れる風景。娘の顔に、野山のともし火がともる。映画の二重写しのように。

ガラスが透明であることとガラスが鏡でもあることをこれほどまでに、美しく象徴的に描いた文章はほかにはない気がします。エロチックで濃密な筆致の直後に、こうした透明感のある描写を持ってくるところが、川端の凄さです。（……）

（拙文「うつる」でも「映る」でもなく「写る」より）

＊

この場面では、主人公の島村が汽車の窓にうつった少女を盗み見している、つまり少女は見られていることを知らないという点が決定的に大切だと思います。

盗み見している人物の行為を、私たち読者が「盗み見する」という構造になっているのです。

この小説の面白さはストーリーだけでなく「する」「される」の関係性だと私は理解しています。

『雪国』という作品は鏡、いやむしろ二重写しになっている汽車の窓なのです。ストーリーだけに還元するにはもったいない細部に満ちています。

＊

このように、においを嗅ぐ行為をしている人が、きわめてプライベートな空間にいるのを感じさせる場面と仕草だと思います。

そもそも、においを嗅ぐときには、人はたった一人で自分の世界に入りこんでいるようです。視覚や聴覚にくらべると、他人と同じ感覚を共有するという感じではない気がします。

鏡と重なるのです。鏡の前において鏡を覗きこむ人もまたきわめてプライベートな空間にいると私は感じています。

あまり他人に見せる姿ではないのです。その姿を見た他人もそのまま見つづけるのを遠慮すべきなのです。

### テリトリーをおかす

こんな文章を書いているのですから、もっと踏みこんでみます。

誰かがにおいを嗅いでいる気配を感じるとき、私は相手のテリトリーをおかした気分になるのかもしれない。

おかす、侵す、冒す、犯す――。

テリトリーで思いだしましたが、私は他人の家に入ることに特別な思いをいただきます。

そもそもふだんから他人の家に入ることがめったにないためか、私は他人の家に入ると恥ずかしさと戸惑いを覚えるのです。

このこだわりは、発汗、口の渇き、動悸、息切れ、過度の緊張、沈黙という形であらわれます。こういう言葉を書いただけで、もうそうになっています。

私が他人の家に入ってまっ先に感じたり意識するのは、その家のおいんです。湿度をともなった、においなのです。

家の中の様子にはぜんぜん目が行きません。においが私を襲ってきます。

## 近さ、親しみ

誰かの姿や仕草を見てその人に同化する。

誰かの声や話を聞いていて、その人が自分に入りこんでくるような気分になる。

誰かと肌で接していて、その人を皮膚で感じてうっとりする。

誰かのにおいを嗅いで、その人に近さや親しみや切なさを覚える。

\*

視覚・像、聴覚・音声、触覚・触感、嗅覚・におい——視覚がいちばん抽象度が高く、触感とにおいがいちばん動物的（悪い意味ではなく文字どおりに取ってください）だと私には感じられます。

いま述べたのは相手が人の場合ですから、味覚と食感はさておきの話ですが、あえて言わせてもらいますと、「食べてしまいたいほど」誰かを愛しているという言い回しは意味深というか、きわめて「深い」と思います。

人の深層と真相を突いた表現ではないかという意味です。

においに対する人の思い入れは、食感に至れないための代償だと言えば、言いすぎでしょうか。

ひょっとすると自分の中に入れてしまいたいのかもかもしれません。美味しそうではなくて、愛していればの話です。

でも、においだけで我慢するのは。もしそうであれば、そこで踏みとどまっている



のは、人間だからでしょうか、ヒトという名の動物だからでしょうか。

### 食う、喰う、食べる

ところで、宇宙人の目からは、この星に棲むヒトという動物同士は共食いしているように見える気がしてなりません。

地球規模で考えると、たぶん人は人を食っているようです。とほうもないアンバランスとか格差とか搾取のことです。

少数が飽食し多数が飢えていると言えば分かりやすいと思います。

人は人を食う。喰らう。食す。いただく。食べる。

食べちゃいたい。

人は人を食う。「食べてしまいたいほど」相手を愛していなくてもです。それは比喻ではなく、人の現実なのかもしれません。

人を食った話に聞こえたら、ごめんなさい。

---

うつせみのあなたに 短文集 その1

---

著 星野廉

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---